

園庭におけるおにごっこの展開プロセス ～おにごっこを展開する保育者の実践知～

著者	郷家 史芸, 松延 毅, 松延 摩也子, 石田 淳也, 本田 由衣, 藤田 清澄, 香曽我部 琢
雑誌名	宮城教育大学情報処理センター研究紀要：COMMUE
号	25
ページ	25-32
発行年	2018-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00000745/

園庭におけるおにごっこの展開プロセス ～おにごっこを展開する保育者の実践知～

郷家史芸¹，松延毅²，松延摩也子²，石田淳也³，本田由衣⁴，藤田清澄⁵，香曾我部琢⁶

¹宮城教育大学大学院生活系教育専修，²社会福祉法人浄勝会出雲崎保育園，

³メリーポピンズ朝霞台，⁴武蔵野短期大学，⁵盛岡大学，⁶宮城教育大学教育学部家庭科教育講座

園庭でのおにごっこが、どのように展開するのか、タイムサンプリングした映像を刺激素材として用いた半構造化インタビューを行い、言語データをサンプリングする。言語データを M-GTA によってまとめ、おにごっこの展開プロセスを明らかにし、保育現場でおにごっこを行う上で求められる保育者の実践知を明らかにしていく。

キーワード：幼児、遊び、おにごっこ、実践知、M-GTA

1. 問題と状況

1.1 おにごっこの有用性

文部科学省（2012）[1]が発表した幼児期運動指針は幼児期には運動の基盤となる多様な動きを獲得すべき時期であるとしている。また、発達に応じた獲得すべき動きの獲得についても言及している。また、幼児期運動指針にはおにごっこをすることで歩く、走る、くぐる、よけるなどといった動作を夢中になって遊んでいるうちに総合的に経験できるとしている。よって、幼児期に必要な多様な動きの獲得のために、おにごっこは幼児期の子どもにとって有効な遊びであると考えられる。

また、羽崎（2013）[2]は仲間の子どもが捕まった子どもを助けに行くといった仲間意識も生まれるとしている。仲間意識の発達に関して、田中（2005）[3]は子どもは加齢に伴い、オニ役割において、集団全体を追いかけるコとして意識し、コ役割においてはオニとコの間係を意識しながら、他の仲間と距離をとって逃げるようになるとしている。

さらに富田（2015）[4]はおにごっこ・ルール遊びの発達の意味として①社会的発達、②知的発達、③情緒的発達、④身体的発達の4点にまとめた。すなわち前述した身体的発達や仲間意識だけ

でなく、将来的に必要とされるスキルを総合的に獲得できる遊びとしてとらえることができるだろう。

1.2 おにごっこの指導プロセス

さらに富田は（2013）[4]はおにごっこ・ルール遊びにおける工夫や配慮すべき点として①子どもの状態を見極める、②ルール理解を徹底する、③安全面に配慮する、④話し合いを大切にする、⑤遊びの楽しさや決まりを追求するの5点にまとめた。さらに遊びの中で起こるトラブルやその対処法についても言及されており、保育者による指導・援助が求められるとしている。

田中（2010）[5]は保育者へのインタビューデータから M-GTA を用いた年長クラスにおけるおにごっこの指導プロセスをまとめた。そのなかで保育者は「遊びの流れづくり」を行い、子どもが自分の意志で参加できるよう「主体的参加への誘導」を行う。また、子ども自身で遊びをコントロールできるようにする「自己メンテナンス化」に向けた指導を行い、3つのカテゴリーがつなぐように子どもの「経験の積み上げ」が機能していることが示された。

1.3 本研究の目的

前述した田中（2010）[5]の研究は年長クラスに限定されているものだった。おにごっこは年長児

だけでなく幼児期の子どもでもできる遊びである。また、保育者からの指導だけでなく、保育者は子どもによるアイディアなどといった、おにごっこの展開を踏まえたうえで遊びを援助すべきであると考えられる。

そこで本研究ではおにごっこの展開プロセスを明らかにし、保育現場でおにごっこを行う上で求められる保育者の実践知を明らかにしていく。

2. 研究方法

2.1 インタビュー

データの収集は、宮城県内の A こども園において園庭でのおにごっこの様子をビデオカメラで撮影する。

おにごっこの映像データを刺激素材として用

いた半構造化インタビューによって言語データをサンプリングする。その言語データを M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）によってまとめ、おにごっこ遊びのプロセスを明らかにする。インタビューには研究者に加え保育歴 5～20 年の保育者 4 名の計 5 名でフォーカス・グループ・インタビューを行った。また、保育歴 20 年の保育者にスーパーバイズを行っていた。また分析テーマは「幼児のおにごっこにおける展開プロセス」とした。

2.2 分析ワークシートの作成

インタビューから得られたデータを表 1 のような分析ワークシートに記入する。得られたデータから概念を生成し、概念をカテゴリー、サブカテゴリーに分類する。分類結果を表 2 に示す。

表 1 分析ワークシート例

概念名	「捕まる－捕まえる」関係性において現れる子どもの気質への適応
定義	「つかまえる－逃げる」というおにごっこの基本的な構造に対して、子ども個人が示す気質へ対応する保育者の理解
具体例	<p>○つかまったら泣いちゃう子とか、オニが多くて、それを捕まえられなくて泣く子とかが結構トラブルになるんで、ちょっと意見がでるのが待ち続け、もうつまんなくなってる。もうおにごっこしたくないって。</p> <p>○でも、やっぱりさっきの子のように、自分はなりたくない子っていうのをある程度把握しながらやっているじゃないですか。</p>
理論的メモ	<p><具体例毎の解釈メモ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・捕まえられたときの反応 ・捕まえられなかったときの反応 ・反応として生起するトラブル ・長時間の混迷による怠惰、離脱

表2 概念リスト

カテゴリー	サブカテゴリー	概念名	定義
保育者の援助展開プロセス	欲求の読み取り	追いかけてほしい欲求の度合い	ハラハラ感覚を楽しむ距離感
		距離の違いによる楽しみ	距離感の違いがいと相手の気持ちを推測しながらの行動が見られる
	保育のプラン	遊びの発展を見通す保育者心理	今後への見通しを持つ保育者の思考
		保育者の段階的な援助の構想	段階的に援助を構想する保育者の姿
	保育における実践	追いかける度合いの公平さ	保育者はやみくもに目の前にいる子どもを追いかけているわけではない。追いかける子どもをどのよう程度おいかけているのか、時間や回数など量的な視点で公平さを意識している。
		刺激の注入による盛り上げ	保育者は、オニごっこに飽きてきている子どもを把握して、その子を追いかけることをおにごっこを展開するための刺激として用いている。
子ども理解の深化	周囲の環境理解	後ろについてくる子どもの把握と対応	オニ役の保育者の後ろについて楽しむ子どもが一定するおり、どの子ができるような反応をするのかを理解している。そして、その気になる子へ視線を使っておにごっこを楽しむことを促している。
		「つかまえるー逃げる」という関係性の中で現れる子どもの気質への適応・把握	「つかまえるー逃げる」というおにごっこの基本的な構造に対して、子ども個人が示す気質へ対応する保育者の理解
	身体的理解	おにごっこに必要な動作	保育者が感じる子どもの体の使い方
		子どもの身体能力の評価	おにごっこにおける必要な動きの要素について
発達への理解	相互性	意識共有的議論	おにごっこをスタートする準備段階としての議論
		遊びの異年齢間伝承性	保育者は異年齢間の遊びの伝承性を自然と保育に含めていく
		子どもによる身体能力の評価	子ども同士で身体能力を把握しあっている。
	性差	遊びの盛り上がり方の違い	男女によるおにごっこの盛り上がりをコントロールする姿の違い
		おにごっこを楽しむポイントの違い	男女によるおにごっこを楽しむポイントの違いについて
		ルールに対する順守性の違い	おにごっこのルールに対する順守性の違いがある
		集団受動的な女子と個人能動的な男子	集団で群れる女の子と個人で挑戦する男の子
	年齢差	追いかける楽しさ	追いかけることを楽しむ
		助けるルール取得の難しさ	オニごっこの持つ面白さの一つに、オニと逃げる側の人数を調整することで、面白さが質的に変容することがあげられる。3歳児では保育者がオニになり、子どもを追うことが多いが、しだいに集団で対抗する「警泥」へと発展していく。

			とくに、「警泥」では、泥棒同士が「助ける」という新たなルールが加わるが、このルールを理解させることは幼児期には困難が伴う。
		プレおにごっこの行動	おにごっこの前段階的行動
		対応の差異理解	年長児がオニ役の保育者に対し、年少児への対応について要請している。
保育者のキャラ	保育者のキャラ	保育者によって異なる追いかかけ方の性差	男児を追いかけるとときと、女児を追いかけるとときに保育者の追いかかけ方やその理由付けが異なる
子どもの遊び発展	自己中心性	優位性を求める子どもの気持ち	遊びを有利に進めようとする気持ち
		不利的状況からの逃避	おにごっこをする際に不利的状況からの逃れようとする
		個人重視型おにごっこ	個人意識の下でのおにごっこ段階
		ルールを逸脱する楽しみ	ルールを逸脱することを楽しんでいる
		自己都合的ルール変更	つかまりそうになるとルールを曲げていく
	協調性	子ども自身の感情コントロール	オニごっこの際に生じるさまざまな感情を制御する力が身につけていることが、チーム戦である警泥を実施する上で重要となる。
		不利的状況の受け入れ	おにごっこにおける不利な状況になった時でも受け入れて遊ぼうとする
長期的な遊びの発展	困難性	おにごっこを展開する上での困難さ	年齢、発達を考慮した援助の仕方
	発展可能性	オニとコの人数調整がもたらすおにごっこの面白さ	オニの数を調整することで、オニごっこ全体の盛り上がりがことなる点を指摘している。
		パワーバランスの調整	身体能力を考慮した遊びでのパワーバランスの調整
		役割の人数調整によるルール理解促進	3歳児におにごっこのルールを教える際に、保育者が見通しを持ちつつ、人数の割合を極端にすることでルールをわかりやすい形で子どもたちに提示する
		おにごっこでのルール公平性維持の深化	3歳児におけるおにごっこの経験の豊かさによって、4歳児におけるおにごっこでのルール理解が深まり、さらに5歳児では公平性についても理解が深まる

3. 結果

M-GTAによる分析を通して生成された概念やカテゴリを図1に示した。まず、生成したパラダ

イム事に説明していく。なお、パラダイム名を【 】, カテゴリー名を《 》、サブカテゴリー名を< >、概念名を〔 〕とする。

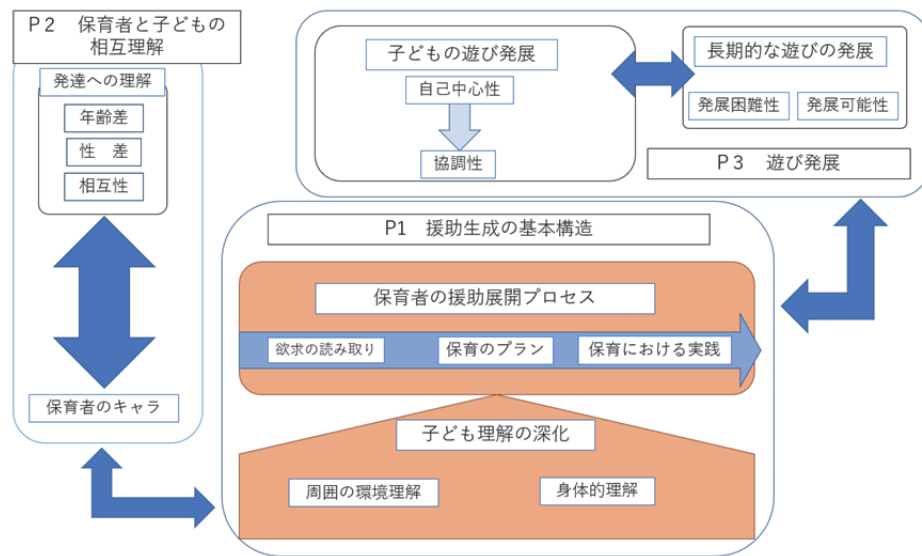


図 1 M-GTA 図

3.1 援助生成の基本構造

おにごっこにおける援助が生成されるプロセスにおいて、まず、「後ろについてくる子どもの把握と対応」と「捕まえる－逃げる」という関係性のなかで現れる子どもの感情的な態度への把握と対応を考慮して、＜周囲の環境理解＞が深まることが示された。そして、さらに、子どもがおにごっこをするために「必要な身体動作」を身に付けているのか、参加する「子どもの身体能力への評価」が行われ、子どもの＜身体的理解＞が促されることが示された。以上のように、保育者が子どもを2つ視点から理解することが示された。そこで、このカテゴリーを《子ども理解の深化》とした。この《子ども理解の深化》を基盤として、保育者は、おにごっこにおける実際の援助について、まず、子ども一人一人が持つ、「追いかけられたい欲求の度合い」を把握し、さらに、追いかける際

のオニとの「距離による楽しさの度合い」の違いを知ることによって＜欲求の読み取り＞を行う。そして、次に、今からはじめるおにごっこが「遊びの発展を見通す保育者心理」を持ち、そのために「保育者の段階的な援助の構想」を行いく保育のプランを立てる。最後に、このプランをもとに、おにごっこをするが、実際の場面では追いかける子どもが偏らないよう「追いかける度合いの公平さ」を意識しながら、飽きそうになっている子どもを追いかけることで「刺激の注入による盛り上げ」を行いつつ、＜保育における実践＞を実行する。以上のように、保育者は、《子ども理解の深化》を基礎におにごっこを援助する過程を3段階に捉えていることが示唆された。そこで、このカテゴリーを《保育者の援助展開プロセス》とし、パラダイム1【P1 援助生成の基本構造】とした(図2)。

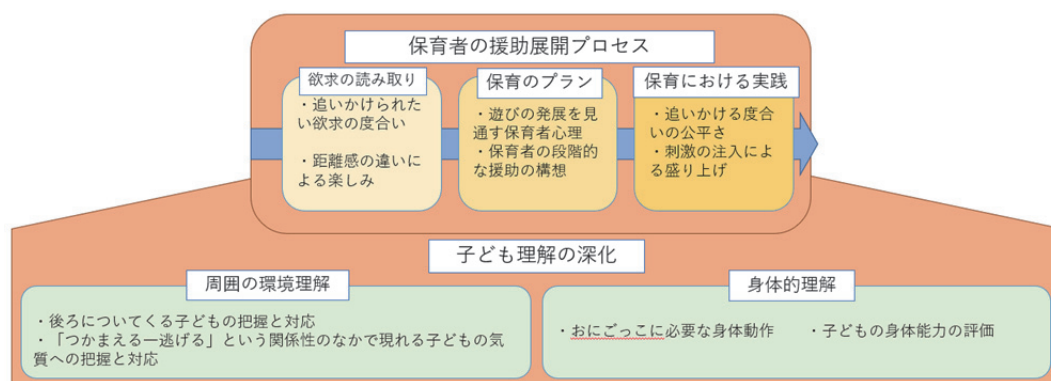


図2 P1 援助生成の基本構造

3.2 保育者と子どもの相互理解

保育者は常態的な子ども理解をベースにしなが
ら、おにごっこの中でも子どもの《発達への理解》
を深めている様子が見られた。特に <性差>と<
年齢差>についての理解が見られた。保育者は年
齢が高くなることに伴い保育者の「対応の差異理
解」をしつつ、遊びに関わっている姿を読み取っ
ていた。そのプロセスの土台にあるのは「追いか
けられる楽しさ」というおにごっこ特有の楽しさ
である。特に年齢が低い子どもは単純に追いか
けられること、つまりは「つかまえるー逃げる」と
いう関係性自体を楽しむ姿である「プレおにご
っこの行動」を繰り返していると理解している。し
かし、おにごっこのルールが複雑化してくるとお
にごっこの種類によっては「助けるルール習得の
難しさ」も同時に子どもの姿から読み取っている
ことが明らかとなった。また、男児と女児の「遊
びの盛り上がり方の違い」や「おにごっこを楽し
むポイントの違い」など、多くの差異を感じてい
ることが顕在化してきた。具体的には群れを成し
て鬼から逃げようとする「集団受動的女の子」の
姿が見られたり、一人で保育者を挑発するために
あえて向かっていくなどの「個別能動的男の子」

の姿が見られるなどである。また、「ルールに対す
る順守性の違い」なども理解している姿が明らか
となった。さらに、おにごっこで遊ぶ過程に見ら
れる「意識共有的議論」の場面や、年齢の低い子
どもが高い子どもの姿を見ることで遊びが伝承さ
れていく「遊びの異年齢間伝承」の場面を通して
理解を深めている。また、「子どもによる他者の身
体能力評価」も年齢が高くなるにつれて見られ
ることを想定している。以上のことから、子ども
同士における<相互性>もまた、保育者の子ども理
解につながっていることが示唆された。これらの
《発達への理解》は《保育者のキャラ》を通して
理解され、保育者の解釈に繋がっている。しかし、
それは一方向的に行われることなく、子ども
もまた「保育者によって異なる追いかける方の性差」
を保育者の行動から読み取り、「子どもによる保育
者理解」を深め《保育者のキャラ》を推測してい
る様子が明らかとなった。つまり、保育者側から
の一方向的な子どもの《発達への理解》ではなく、
子どもの側も保育者を理解し、関わり方を変化さ
せることでおにごっこの継続に寄与していること
が明らかとなった。そのためパラダイム2を【保
育者と子どもの相互理解】とした（図3）。

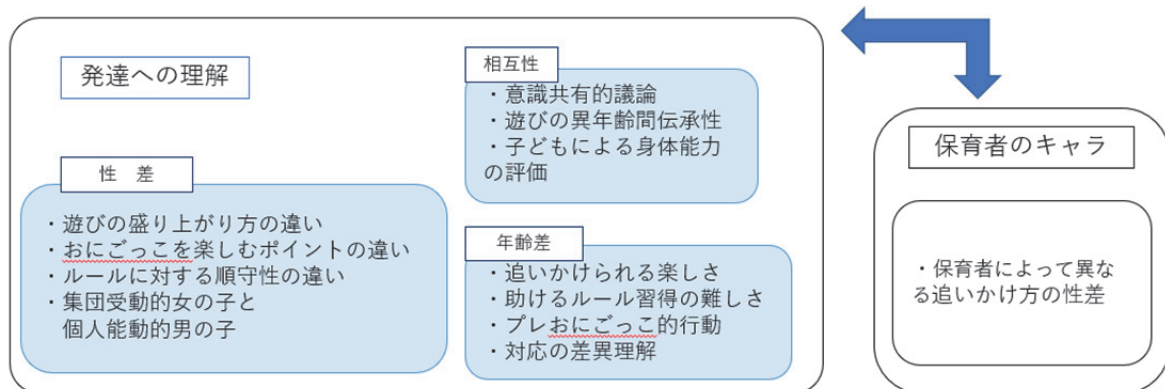


図3 P2 保育者と子どもの相互理解

3.3 遊びの発展

おにごっこにおける遊びの展開プロセスにおいて、まず、子どもが持つ「優位性を求める子どもの気持ち」から、子どもがおにごっこを有利に進める上で、自分が捕まるリスクを避けるために「個人重視型おにごっこ」を求める。また、オニに追い込まれたときに生じる不利状況を回避したいという気持ちから、「不利状況からの逃避」のための「自己都合的ルール変更」を行い、その遊びの中で「ルールを逸脱する楽しみ」を感じることから、子どもが持つ「自己中心性」から遊びの展開が始まることが示された。その後、おにごっこの際に生じるさまざまな感情を制御する力が身につく「子ども自身の感情のコントロール」を持つようになることで、おにごっこの中で不利な状況に陥った時でも「不利な状況の受け入れ」を行うことができるようになることから、「協調性」が生まれることが示された。以上の2点から子どものおにごっこの遊びが展開されることが示された。そこでこのカテゴリーを《子どもの遊び発展》とした。

また、長期的に考えれば幼児の経験に基づいた「＜発展可能性＞」もある。例えば「パワーバランスによる調整」により「オニとコの人数調整がもたらす面白さ」を感じることができる。おにごっこの経験が少ない3歳児に対しては保育者が見通しを持ったうえでオニとコの人数配分を極端にすることでルールをわかりやすく子どもたちに提示するための「役割の人数調整によるルール理解促進」により4歳児ではルール理解が深まり、5歳児では公平性についても理解が深まることで「おにごっこでの公平性維持の深化」につながる。一方で「おにごっこを展開する上での困難さ」もあり、人数調整に不満を感じる。または途中から参加した子どもが増えることによって人数調整が難しくなるといった「＜発展困難性＞」が考えられる。よって保育者は「＜発展可能性＞」「＜発展困難性＞」による《長期的な遊びの発展》を見据えつつ、「＜自己中心性＞」や「＜協調性＞」から生まれる《子どもの遊び発展》を時には取り入れ、時には抑制するなど、遊びを調節する専門性が必要となると考えられる。そのため、パラダイム3を【遊びの発展】とした（図4）。

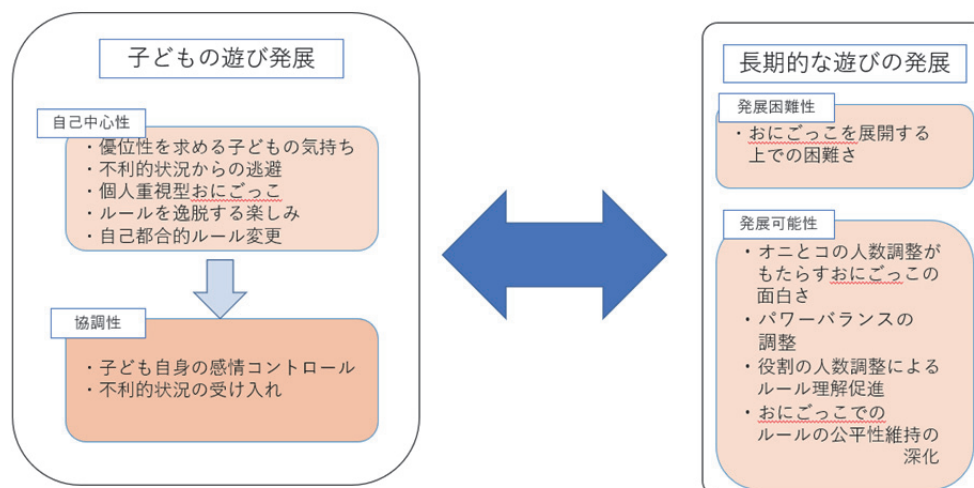


図4 P3 遊びの発展

4. 総合考察

本研究ではおにごっこにおける保育者の援助がプラン通りに実行されるだけでなく、その場の子どものおにごっこへの意欲や全体の盛り上がりなど、その場の状況変化に即時に対応するために実行されていることが示された。また、保育者が子どもの発達への理解をするだけでなく、子どもたちも、追いかけてくる保育者の性格や気質などを読み取りつつ、双方向的な相互作用の中で「捕まえるー逃げる」という関係性を維持していることが示された。

の指導プロセス, 教育心理学研究, 第 58 巻, pp.212-223 (2010)

参考文献

- [1] 文部科学省：幼児運動指針（2012）
- [2] 羽崎康夫：元気いっぱい！鬼ごっこ 50 pp.2-3, ひかりのくに（2013）
- [3] 田中浩司：幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達 発達心理学研究, 第 16 巻, 第 2 号, 185-192 (2005)
- [4] 富田昌平：鬼ごっこ・ルール遊びの展開における保育者の指導・援助 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第 33 号, 19-26 (2015)
- [5] 田中浩司：年長クラスにおける鬼ごっこ